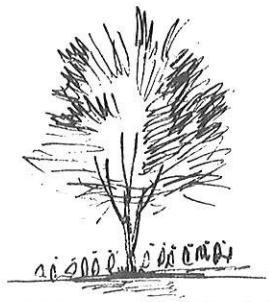
ひかりのこ

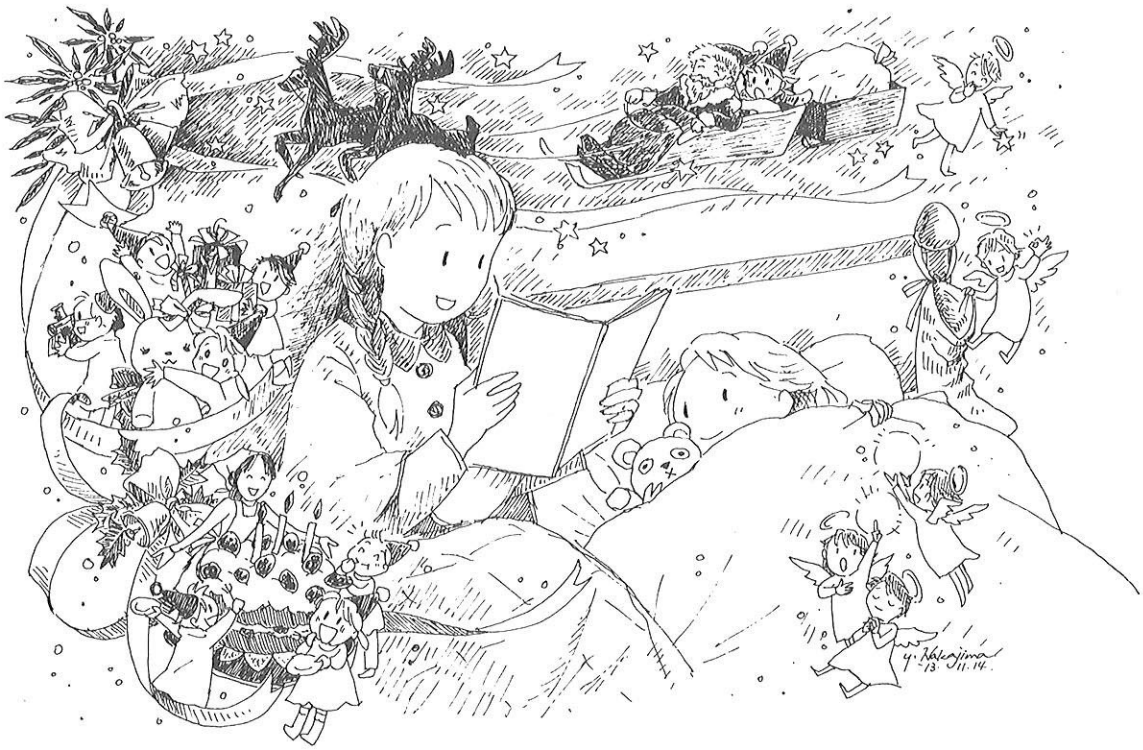
光の子



No.161　2013.12.10

●年間聖句　あなたの口を開いて弁護せよ。ものを言えない人を、
犠牲になっている人の訴えを。（箴言３１章８節）

クリスマスおめでとうございます。
祝福豊かなクリスマスになりますように。
社会福祉法人　光の子どもの家



「クリスマスの夜」　挿絵・中島由起子

「一輪は」

常若（ときわか）の閨句はせて御遷宮
空澄みて水澄みて神遷（うつ）りけり
鳥渡るうまし国なる空広げ
一輪はそつぽを向いて秋の薔薇
夕月へ手締めの揃ふ酉の市
追ひ抜いてゆく風ばかり黄落期
年の暮おもひおもひに空仰ぎ

俳人　黛　まどか

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277　印刷／プリンテング瑛和

暗さの中に射し来る光に照らされ

女子聖学院中学高等学校校長　阿　部　洋　治

私たちクリスチャンは、クリスマスの季節になると、「本当のクリスマスを教会で!!」と世の人々に向かって呼びかけます。「クリスマスはサンタクロースが来ることではない」、「おいしいご馳走を食べたり、ケーキを食べたり、プレゼントを交換することではない」、「イエス様のお生まれをお祝いする時なのだ」と。しかし、改めて問うて見たいのです。「本当のクリスマスを教会で!!」という時、いったい何をもって「本当」と言えるのでしょうか。イエス・キリストの誕生についての聖書の箇所を朗読し、「きよしこの夜」「諸人こぞりて迎えまつれ」等々の讃美歌を歌い、メリー・クリスマスと挨拶を交わし合うことで、「本当のクリスマス」をお祝いしたことになるのでしょうか。

私は、通勤のために早朝に起床しますが、晩秋を迎え、今は真っ暗の状態です。しかし、部屋の電気を消してカーテンを開けて実感させられることは、部屋の電気がついている状態では見えない外の光が見えて来ることです。比較的遠くの家の窓からこぼれる淡い光でも、暗い部屋に何らかの影響を与えていることにも気がつかされます。クリスマスとは今身近にある光を消して自分を覆っている暗い闇に身をさらし、暗い闇の中でなければ見えない光へと目を向けることではないでしょうか。

ルカによる福音書には、夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちのところに主の天使が現れて救い主の誕生を告げたという出来事が記されております。彼らが天使の告知を聞いたのは暗い夜でありました。「暗い夜」とは、この世の光が消えた闇の世界の象徴でもあります。この羊飼いたちは、コヘレトが語る「空しい」(1・2)世界の中に置かれていたのではなかったでしょうか。コヘレトは語ります。「見よ、虐げられる人の涙を。彼らを慰める者はない。見よ、虐げる者の手にある力を。彼らを慰める者はない」(4・1)と。そこは生きることに意味や喜びを見出せない空しい現実であります。虐げられる側の人だけではなく、虐げる側の者も、「既に死んだ人を、幸いだ」「更に生きて行かなければならない人よりは幸いだ」「いや、その両者よりも幸福なのは、生まれて来なかった者だ」(4・2~3)と言いたくなるような空しい現実に直面するのです。おそらく、羊飼いたちは、このように、この世の光が消えた闇の世界に身を晒すことを余儀なくされた人たちだったと思われます。そして、そういう中にあって、彼らは主の栄光の光を仰ぐことになったのです。本当のクリスマスがこの世の光ではない主の栄光の光を仰ぐことにあるとしますと、野宿しながら羊の番をしていた羊飼いたちこそ本当のクリスマスを祝った最初の人たちと言えるのだと思います。

今、このようなことを記しながら、私の心の中に浮ぶのは、3・11で被災され人生の空しい現実に直面させられた人たちのことです。そして、この一年、数々の自然災害がありました。そして、どんなに多くの人々がコヘレトの見た空しさの現実に直面させられたことでしょうか。いや、空しさの現実に直面している人々は、自然の災害に見舞われた方々だけではありません。豊かさ、便利さ、快楽、あるいは地位や名誉の光に照らされながら、本当は空しさに直面しているのではないでしょうか。私の祈りと希望は、あの羊飼いたちが、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」(ルカ2・15)と言って立ち上がったように、空しさに直面している私たちが心の深みにおいて立ち上がり、空しさの経験なしには語れない人生の奥義を分かち合う時が来ることです。

妻の居ぬ間の大事件

老健施設みゆきの丘施設長　仙道　富士郎

妻が3人の姉妹と一緒にスペイン旅行に出かけ、10日ほど留守にした。料理を作るのは苦にはならない。常に満杯になっている冷凍庫と冷蔵庫の冷凍室を、妻が留守の間に、空にするたくらみが頭を持ち上げ、まずはチェックと冷凍室をかき回してみる。表面に氷が浮いてきているアイスクリームは食べられないことはないが、あまりうまくないので捨てる。冷凍ビーフン2個入りのパックを見つけ、休日の昼に一個食べてみる。悪くはない。冷凍した山菜はどうせうまくはないだろうとゴミ箱にいれる。冷凍になった鶏肉は冷蔵庫で解凍したのち玉ねぎと炒めて食べる等々、種々試みるのだが、なかなか冷凍室のスペースは広がっていかない。

気がついてみると、5日で体重が2キロ増えていた。鶏肉にしても、多いなあとは思ったものの、冷凍室の整理屋が残り物を出すわけにはいかないので、全部切って炒めてしまう。食べる段になると、また、多いなあと思うのだが、諸ロック（イモ焼酎のオンザロックの杯が進むころには、残してもしょうがないとフライパンの鶏の炒めものを平らげてしまう始末。

太るくらいは仕方ないのだが、老健に出かける前にずり落ちた掛け布団をベットにかけ直していると、妙に寂しさが湧いてくるのには参った。その動作をするときになると、決まってそんな思いに駆られる。たとえば、妻が私よりも早く死んだとしたら、こんな気持ちで毎日過ごすのかなと思うと、どうしても妻よりも先に死ななければならないと思う。だが、死ぬのも怖いなあ。

ロータリーに参加しているのだが、所属している山形ロータリークラブと遠方、九州の宮崎ロータリークラブは設立年度やクラブの規模が似ていることから姉妹クラブになっている。

11月1日には総勢18名の宮崎ロータリーのメンバーが山形を訪れ大宴会となった。翌日は両ロータリーのメンバーの多くは、ゴルフを楽しんだのだが、ゴルフを希望しない人もわずかながらおり、ゴルフをしない私は、山寺・蔵王の観光コースを回る2人の方々の案内のお手伝いをした。お手伝いと言っても、ただ、車の助手席に座っていて、ときたま会話に加わるくらいの話である。山形に来て35年にもなるのに、どこも良く知らない。

わが山形ロータリーの幹事さんが私にこの役を依頼したのは、実は理由がある。宮崎ロータリーの会長さんが観光組に参加したのだが、この方は現在宮崎大学の理事と病院長を兼務している方で、同じような商売をしてきた私と話が合うと思ったらしい。

とても温厚な方々で山寺も蔵王も楽しんでいただけたようで、ほっとしていた。ところが、山形駅で宮崎のみなさんを送り出したそのあとが良くない。山に登るからとテニスウエアで参加した。とてもよく晴れた秋の日で、山寺の階段を登ってけっこう汗をかいた。お客さんを送り出して、我が家に戻り、汗のしみ込んだウエア、帽子などと一緒に、たまったパンツ、食べこぼしで汚れた部屋着も洗濯機に放り込み、洗濯機はいっぱいになった。

ところが、45分経って終了の合図で洗濯機を開けたとたん、私の頭は真っ白になってしまった。いや、真っ白になったのは、頭だけではなく、洗濯物全体に白い粉がふいて真っ白になっているではないか。しばらくの間、私はなにが起こったのか分からず、茫然としていたが、空っぽになったポケットティシューの袋を見つけたとき、すべてを了解した。多くの読者のみなさんも同じ経験をお持ちでないかと思うのだが、ティシューが全部洗濯機の中で溶かされ、その粒々が洗濯物に付着した結果なのである。ティシューの粒々を洗濯物から取り除く死闘についても、みなさん良くご存じのことでしょう。

そもそもが、ティシューを持ち歩くことなどいつも失念して、妻にいさめられているのである。その日、洋箪笥の上にティシューを見つけ、山のトイレには紙がないかもなどと、余計なことをおもいついたのが運のつきであった。

「共育ちカンガルー日記」

（26）全員リレー

近藤みちる

その日は朝から雲ひとつない青空が広がり、最高の運動会日和となった。園庭には小さな楕円形のトラックとたくさんの白線が引かれ、四方に張られた万国旗は、澄み渡った空によく映えていた。プログラムはこの日一番の花形競技、年長組の紅白リレー。優希は赤組の一番走者として。真っ赤なバトンを手にスタートラインに立った。

思えばここに至るまでには、いろいろないきさつがあった。紅白リレーは年長組の子どもたちが一番楽しみにしている競技で、正真正銘の真剣勝負である。クラス全員が紅白二チームに分かれ、それぞれトラックを一周ずつ走りバトンを繋いでいく。練習は夏休みが明けた新学期初日から始められ、ほとんど毎日のように繰り返された。保護者に対して担任から、紅白リレーの教育的な意味合いについて、次のような説明があった。紅白のチームに分かれて競わせるのは、あえて「勝ち負け」を意識させるためであり、勝つために練習を重ねる中で、子どもたちの間にチームワークや団結力を培っていくのがねらいなのだという。だから練習といえども毎回が真剣勝負。子どもたちは日に日に走り方もバトンの受け渡しも上達し、タイムも速くなっていった。

優希は赤組になった。もともとお友達と一緒に走ることは大好きで、自由遊びの時間には自ら鬼ごっこの輪に加わり、ルールに関係なくみんなと一緒にわいわいと走り回っている姿がよく見られていた。それと同じノリで、リレーにもすぐに興味を持った様子であった。

だが優希にリレーを走らせてみると、トラックを回り切らずに途中からコースを外れてしまったり、バトンを投げて遊び始めてしまったりと、全くリレーにならなかった。優希にとっては、あくまでも遊びの延長でしかなかったようだ。障害の特性で「ルール」という日に見えないものを理解するのが苦手な上、「勝負」という概念はまだ優希には存在せず「競走」の意味すら分かっていないのだ。これではどんなに練習を重ねても、優希がリレー走者になることは無理だと思った。クラスメイトにとって最高の晴れ舞台である紅白リレーが、優希一人のせいで台無しになってしまったらと思うと、正直気が滅入った。リレーへの参加は諦めた方が得策ではないのかとさえ、私は考えはじめていた。

だが有り難いことに、お友達の方は優希のことを随分と理解してくれるようになっていて、優希のこうした困った行動を非難したり責めたりする子は一人もいなかった。そればかりか、どうしたら優希がみんなと同じように走れるのかを一生懸命考えてくれるようになっていた。優希がコースを外れると「ゆきちゃーん、こっちだよー、がんばれー！」とみんなで声援を送り続けてくれた。先生は、こうした子ども同士の結びつきことそが何より大切で、何としてもクラス全員でこのリレーを成功させたいのだと言ってくれた。先生やお友達の思いに、私は胸がいっぱいになった。

試行錯誤の末、先生はこんな方法を編み出した。優希は普段、お友達の手本があるとそれを真似て、最後まで頑張ってやり通すことが出来る。だからリレーでも同様に、お友達に手本になってもらうのだという。優希は赤組の第一走者に、そして優希が慕っていて手本になれるお友達が白組の第一走者になる。その子には、スタートから第二走者へのバトン渡しまでのすべてを、優希のタイミングに合わせて手本となってもらうわけだ。第二走者からが本当の真剣勝負となり、優希の手本となるお友達は、真剣勝負の方でもう一周全力疾走してもらうこととなった。先生のねらい通り、優希はようやくリレー走者の一員になれた。そして今日のこの時を、お友達と一緒に笑顔で迎えることができたのである。

「位置について、用意！」一瞬の静寂の後、ピストルの音が響いた。優希は緊張するどころか、晴れの舞台が嬉しくてたまらないようで、満面の笑顔で跳ねるようにスタートを切り、次第にスピードに乗っていった。大声援に包まれたトラックを、大好きなお友達と並んで、風を切り、土煙を上げて駆け抜けていった。そして第二走者へしっかりと、バトンを繋いだのだった。

熱戦の末、軍配は白組に上がった。勝負の後には、勝者も敗者もそれぞれが清々しい顔をしていた。その中に、ひと際清々しい優希の笑顔があった。みんなで頑張った全員リレー。それはみんなの心に、そしてひとしく優希の心に、かけがえのない大切な何かを残してくれたはずである。

熱戦の果ててとんぼの空となる
みちる

ナニカチョウダイ

中島　睦雄

美術の秋という言葉がある。と言うより、昔はあったと言うべきか。

今は秋に限らず、夏といわず冬といわず、美術の活動は一年中盛んである。

私が関わっている美術団体でも（60年以上続いているのだが）、中心となる展覧会は毎年春に行われ、秋季展という小品だけの作品展も、画廊で行っている。

つまり、一つの美術団体でも、春と秋に展覧会をやっているという訳である。もちろん、色々な団体やグループ、個展など、冬でも大小盛んに行われているのである。

上野の東京都美術館の春の展覧会で、私は何人かの人と審査を担当した。彫刻団体での審査は、なかなか大変である。

絵などの場合、審査員は椅子に腰かけていて、係の人が次々と作品を運んで、審査員の前に提示するのである。

入選か落選か。審査員の手が多く挙がれば入選、手の挙がり数が一定の数より少なければ落選である。この段階では、審査員は椅子に腰かけていて、手を挙げ下げしていれば良いのである。

ところが彫刻の場合（これは私どもの団体での事だが）搬入された作品の置かれた場所へこちらから出ていって、作品の一つ一つを前後左右から見なければならない。そこで入選か落選かを決めていく訳である。入選作品は会場に展示されるが、落選作は〝オクラ入り〟である。

次いで、賞を決める訳である。これは、会場いっぱい陳列された作品を、審査員は一点一点見てまわらなければならない。そして、審査員全員の協議を経て、賞が決定するという流れである。ただし、文部科学大臣賞に関しては、一応の候補作を出しておいて、外部の審査員（美術評論家など）によって決めてもらうのである。これは恐らく、団体内部のいろいろな事情で文部科学大臣賞が決められることを避けるための考慮によるものであろうが。こんな訳で、彫刻団体における審査は、なかなか大変である。よその団体はどうかわからないが、私どもの団体では、神経も使うし、体も疲れるのである。

とは言え、意欲的な作品や、優れた作品に出会うと、これは嬉しいものである。と同時に、自分の作品に対する反省にもなる。長年出品を続けていると、何とかかんとか言いながらも、何とか作品は作れてしまう。いわゆる〝マンネリ〟である。したがって、下手だったけれども若い頃の作品が意欲的で良いものを見せていたし、反対にベテランの人の作品で、技術的には大変うまいが、つまらないということもあり得る訳である。

その春の展覧会の折、Sさんという女性の作品が、何となく伸びてきたように思えてきた。もちろん欠点はあるが、明らかに意欲が感じられたのである。この展覧会で、Sさんは或る賞を取った。私自身も一票を投じたのであるが。

展覧会の会期中、Sさんは親しくしているTさんという女性と一緒にいた。事務所でだったと思う。

私もその2人と雑談していたのだが、いつの間にか、今度の作品のことなどに、話が流れていった。

私は、Sさんの最近の作品の傾向や、意欲、受賞した作品などについて感じたことを述べた。別に改まった話ではなく、雑談の続きのようなものだったのだが、いくつかの点について、褒めたのである。

そこで私は、ほんの冗談のつもりで言った。

「これだけほめたんだからナニカチョウダイ。」

Sさんは一瞬、にっこりとしたが、すぐ真面目な顔になった。

SさんとTさんは、その場を離れて移動していったが、Tさんの話によると、私のあの冗談を、Sさんは真面目に受け取ってしまったらしく、

「審査員の先生に、何かお礼をしなくちゃあいけないんかしら」

と聞いたというのである。

私は、びっくりしてしまった。私どもの団体には、入選しようが特選を取ろうが、審査員等に金品によるお礼をするという習慣は、全くない。全くない団体だから、私の言葉は、完全な冗談なのである。こんなことを真に受け取られるとは、思ってもみなかった。私が困ってしまったことは言うまでもない。

したがって、いくら冗談だとしても、間違っても〝これだけほめたんだからナニカチョウダイ〟なんて、絶対に言ってはならないのだった。浅はかであった。

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節

仙道家

冬らしい寒さになってきましたが、皆様お元気でしょうか？我が家では咳をしている子が多くなってきました。

先日の感謝の集いでは沢山の方々が来訪してくださり、ありがとうございました。

先日、ハロウィンの仮装パーティーをしましたが、ハロウィンの次はクリスマスです。私は家のガラス窓にジェル状のステッカーを貼ったり、クリスマスの飾りつけをするのが好きです。ハロウィンが終わったので、早速一足早くクリスマスのステッカーを窓に貼りました。子どもたちは気付くなり「かわいい！」「サンタにしたんだ！」と反応してくれました。

クリスマスはイエス様の誕生を祝う日ですが、子どもたちにとってはプレゼントが届くもしかしたら誕生日よりも楽しみな日になっていると思います。毎年、サンタさんとの出会いのエピソードが沢山生まれます。本来のクリスマスの意味を伝えることも大切ですが、今年はどんなエピソードが生まれるかと、子どもだけではなく、私自身も楽しみです。

田口　貴子

光の中で

佐藤家

クリスマスおめでとうございます。今年は例年になく秋を感じる期間が短いせいか、あっという間にクリスマスという感じです。

今年は私にとって職員になり2回目のクリスマスです。去年よりも思い出に残るクリスマスにするためにも早くからクリスマスの準備に取り掛かろうと思っています。

ところでクリスマスを迎えるにあたり佐藤家では、幼稚園児の絵美ちゃんが小学生の愛ちゃんにダンスを教えている所にたまたま居合わせることがありました。そのダンスというのは、某ジャニーズグループのクリスマスソングの振付を覚えたようで、音楽に合わせて二人で踊っていました。

途中、愛ちゃんが振付を間違えると、

「そっちじゃないよ、こっちだよ。」

「ちがうよ。伸ばすの。」

と、幼稚園児が小学生に対して、多少強めな言い方で振付の修正をしていたので、少し心配しながら様子を伺っていましたが、愛ちゃんは絵美ちゃんの言い方に反発することなく、笑顔で振付を修正している場面を見てなんだか心が温かくなりました。

このとき2人の関係は、幼稚園児と小学生ではなく、先生と生徒、もしくは、師匠と弟子だったのではないかと思いました。このように大人目線ではわからないことがたくさんある日常ですが、楽しく子どもたちと関わり続けて行きたいと思います。

追記…私も2人の間に飛び入り参加しましたが、2人からけちょんけちょんにけなされました(泣)。

新吉屋　健太

原田家日記

クリスマスおめでとうございます。今年も子どもたちと共にクリスマスを迎えられることを嬉しく思います。

子どもたちがここにやってきてから、彼らの家族との交流を持てる子もいれば、持てない子もいます。

久志はここにやってきて5年になりますが、まだ家族と会ったことはありませんでした。家族に会いたい、一緒に暮らしたいという決して贅沢ではない願いを久志も持っていました。

児童相談所の福祉司も色々と調査、調整をしてくださり、ようやく家族と会うことができました。私たちの元へ福祉司と訪れてくれました。久志は久しぶりに会ったので、「誰かわかる？」と聞かれても分かりませんでした。

とても緊張し、どうしてよいのかわからない、といった表情でした。初めて見る久志の様子でした。

それでも少しずつほぐれ、「学校では算数が好き」など、学校のことも話しました。ふいにつぶやくように「オレ、高校卒業したらどうするのかな」と言います。高校を卒業した先輩たちは家に帰れる子もいれば、自身で生活している子もいます。それを見ているからでしょう。「まだ時間があるからゆっくり考えていこうね」と福祉司が答えてくれました。

高校卒業後の心配と不安、そして家に帰れるかもという期待が入り混じった思いを抱えている小学生はあまりいないだろうと、胸が痛くなる出来事でした。

池田　祐子

季節のおとずれ

竹花家

「晴一！起きて～！ご飯食べて～」

「寒い～ムリ～7時になったら起きるかもぉ…」

―7時。

「晴一7時だよ！起きて！もう、みんなご飯食べちゃったよ！」

「寒い～！足、寒いんだよ～！」

(布団を剥がされ…)

竹花家の朝の風景です。

晴一の通う高校は近いため8時に朝食を食べても間に合います。竹花家の朝ご飯は6時半から。これは一番早く家を出なければならない小学生の時間に合わせています。夕食は部活や塾など帰宅時間がバラバラで、全員揃って食卓を囲むことが難しい日もあります。そのため、朝ご飯だけでもみんなで顔を合わせて「いただきます」ができたら…というのが担当者としての願いでもあります。しかし、「こんな早く起きなくても間に合うのに！」と中高生に言われることも。卒園して一人暮らしをはじめたら、自分の都合で一人で食事を摂ることが増えるでしょう。だからこそ、人と共に暮らす、一緒に生活する人を思うということを、今ここで感じて欲しいと思っています。

けれど…今日も晴一が起きて朝食を食べはじめる頃には、小学生も中学生もとっくに朝食を食べ終え、登校した後。私が洗濯物を片手に、すっかり冷めてしまった朝食を温め直しながら「もぅ、あと30分でいいから早く起きてよ。みんなとご飯食べようよ」と言うと、晴一は「牧野さんの起こし方が悪いんだよ～」と笑顔。そして、用意されたほかほかのお茶漬けを食べながら「あぁ～心があったまるねぇ♪」とご機嫌。その言葉を聞いて思わず、「体じゃなくて心なんだ」と私も笑顔に。もちろん、みんなそろってで朝ご飯を、という思いは変わりません。しかし、寒い朝、みんな登校してしまった後のダイニングで他愛もないおしゃべりを楽しみながら、ホカホカの朝ご飯を食べて暖まる…そして元気に「じゃ、行ってくるね！」

卒園まであと1年と少し。もしかしたらこういった時間も今の彼にとって必要なのかな、と思いました。

牧野　由紀子

河のほとりで

倉澤家

今年もクリスマスシーズンがやってきました。この時期の食卓の話題の中心は、ページェントの配役とクリスマスプレゼント。ページェントではその年の高校3年生が主役を務めるという伝統があり、先輩たちがその伝統を守ってきたこともあり、高校生という多感な時期ですが、皆文句を言わず、この伝統に従っています。そして今年の主役のマリアは、光の子どもの家が世界に誇るゴッド姉ちゃん(笑)高校3年生の史佳です。彼女も今年は自分がマリアと覚悟していたようで、当然のこととして受け入れていました。ただ、相手役のヨセフを演じるのが誰になるかはまだ未定。現在、中高生は男子が少ないため、誰がヨセフ役を演じるのか（職員という可能性もアリ）は12月1日の第1アドベントまでのお楽しみということになりました。

さて、そんな今年のマリアですが、年が明けると看護学校を受験します。現在、受験に向けて猛勉強中。彼女の夢がかなうよう、応援していきたいと思っています。

プレゼント選びには、毎年サンタクロースも頭を悩ませているようです。ただ子どもたちは数年前にもらったプレゼントのことをよく覚えていて、今も大切にしています。このことを知ったら、サンタクロースも喜ぶでしょう！

アドベント期間中、子どもたちと準備を重ねて迎える「光の子どもの家のクリスマス」。その「光の子どもの家のクリスマス」は、私にとって「私のクリスマス」になりました。

倉澤　智子

養護メモ 140

養育論の試み その14

隣る人10 はたらき

菅原 哲男

先頃光の子どもの家の29回目の感謝の集いをたくさんの方々においでいただき盛会裏に執り行った。

そのための準備の時期に、筆者は長期の休暇を取った。それはかなり複雑な事情によっているのだが。

感謝の集いの準備は心にかかっていた。田中施設長は大きな手術をして未だ回復していない。メールでのやりとりなどで最小限の指示や確認をしながら、集いの前日に休暇を終えて光の子どもの家に帰った。

なんと、鈴木洋一、福島文明などの指導員たちが環境整備を中心に準備を進め、近親者の葬儀や入院する者があったりの困難な状況であったが、職員たちが一丸となって見事に落ち度のない準備ができあがっていたのである。各家で一品ずつ作って盛り合わせた見事な230食もの弁当作りなど、忙しく立ち働いている姿を見て感動さえ覚えた。

その日、集まったお客様の何人かから、自分の子どもにも出来ないようなことを、よくおやりになって、と語りかけられた。

自分の子どもにも出来ないことをよくしているということの意味について考えてみる。

この国の若い親たちが繰り返すいわゆる虐待の数は、年間7万件に及ぼうとしている。これは児童相談所に通報・通告されて関わったもので、氷山の一角に過ぎないのである。芹沢俊介によれば、氷山をなすほど人と人との関係が冷却していることなのである。野坂昭如が毎日新聞の連載で「現代の若者や子どもたちの会話は、ケータイやメールなどがほとんどで、それは機械を通じてしている、人間がもとより持つ関係性は変質し希薄化するのは当然」と指摘していた。その流れは、私たちも今年、高校生にケータイを持たせたことのようにとどめがないようである。

そのような現代の家庭における家族関係から捻りつぶされ、放り出された子どもたちを預かって出来るだけまっすぐに育てようとしているのが児童養護施設のはたらきである。善通といわれる家庭の親たちと同じ程度の関わりで何とかなる状況にはないことを確かめておきたい。

最も安心して抱き合えるはずの親子関係が、希薄の度合いを極め続けているのである。虐待する者の70%弱が実母によってなされ、その理由の60%強が、泣きやまなかったからだという。(厚労省HP)

そんな事情から、子どもたちはまさに叩き壊されてやってくるのである。普通の親のような関わりでその壊れや歪みなど正される訳がないのだ。

一昔もふた昔も以前の親たちは、子どものためにいのちを投げ出すことをためらわないことが多かった。少なくとも今よりははるかに。それが私たちの子ども時代の親の像であった。私事だが筆者は6人兄弟で、敗戦の年に小学校に入学し、この国の飢餓時代に学童期を過ごした。食卓で給仕していた母親が食事している姿を見たことがない。母はほんの少しでも残りがあればそれを食べてしのいでいたのだ。それに気づいて姉と目配せをして母に食事が残るように我慢したことは今も鮮明である。その時代には珍しくはなかった。

私たちは自分の口を糊するためにはたらいている部分がないとは言えない。しかし、それだけのためにここに来た者は一人もいない、と断言できる。子どものためにわたしを差し出す覚悟だけは出来ていて、その覚悟をどこまで引きずることが出来るのか、それが課題の大きなものでもある。

子どもにとってもっとも身近な親は、子どものためにいのちさえ投げ出すことが出来ることを、ここにやってきた子どもたちに伝えなければならないのである。それが在るべきだった親＝他者の姿であることを。

いのち、それは暮らしである。私の私的な暮らしを子どもたちに重ねるのである。子どもたちはここで私的な暮らしをしているのだから。

いつも出来ているわけではないが、私たちはそれを目指してきた。

私のしたいことをしたい。欲しいものを得たい。予定通りに私の暮らしをしたいから邪魔しないでくれ！これが、泣きやまない子どもを、自らの手で生命身体の危険にさらした親や家族たちの言い分であり、状況なのである。それと無縁な状況を私たちは生きているわけではないが。

自ら困難な働きを引き受けて得た私的な暮らしを、赤の他人が生み育てられず、虐待さえされた子どもたちに差し出すここの大人たちの姿は、よくもまあ！と映るのだろう。

時はクリスマス！家畜小屋に生まれ、自分の暮らし＝いのちを他者のために差し出して殺されていったイエスは、今も生きてはたらくのである。

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

クリスマスおめでとうございます。

寒さに身を縮めながら見上げる星空は、なぜこうもきれいなんだろう…。何年経っても、何度でも、見上げる度に思ってしまいます。

特にここの園庭から見る星空は、まさしく降り注いでいるように間近に、星が大きく見えるのです。

小さな理奈に亡くなっている母のことを伝えるとき、

「理奈のお母さんはお星様になったんだよ。それで、ずっと見守ってくれているんだよ。」

と言いました。理奈は私に抱っこされながら、

「あれかな。あれだよ、きっと。」

と手を伸ばして星を指し、そして少し嬉しそうでした。

卒園生の三浦兄弟の母が亡くなったという知らせは、あまりにも唐突でした。

母はアルコール依存症で何度か倒れられたこともあり、彼らからは時折、

「もし、お母さんが死んだら、葬式とかどうすればいいのかな…。」

という話はありました。

でも、亡くなる2日前くらいには穴水指導員に、1日前は兄の方に母から電話があり、話をしていたのです。

卒園して数年経つ彼らの、というより母の親族探しは困難でした。彼らの異父兄は、今もまだ母の死を知らないでしょう。人はこんなにも過去や血脈を絶って生きていけるんだ、ということが大きな衝撃として残りました。

結局、うちでやるしかないだろうということで、前夜式、告別式はうちでやらせて頂きました。

20歳そこそこで喪主を務めなければならなくなった兄は、気丈に2日間ともしっかりと挨拶をしました。

「これからは兄弟2人…」

元々、親を頼りにするというような暮らしではなかったと思いますが、実際に居なくなられた時の虚無感は想像以上だったと思います。彼らは1週間ほどこちらに泊まって、また元の生活の場へと戻っていきました。何とか、心に折り合いをつけながら生きていってほしいと祈ることしかできません。

今回のことでは、丘実も揺れました。

食卓でいきなり怒ったように、

「丘実はどうすればいいの？」

と言い、

「お母さんが亡くなったら、ってこと？」

「そう。」

「そのときの状況によって違うんじゃない？丘実ちゃんが何歳か、とか…」

でも丘実は、考えたくないというように、

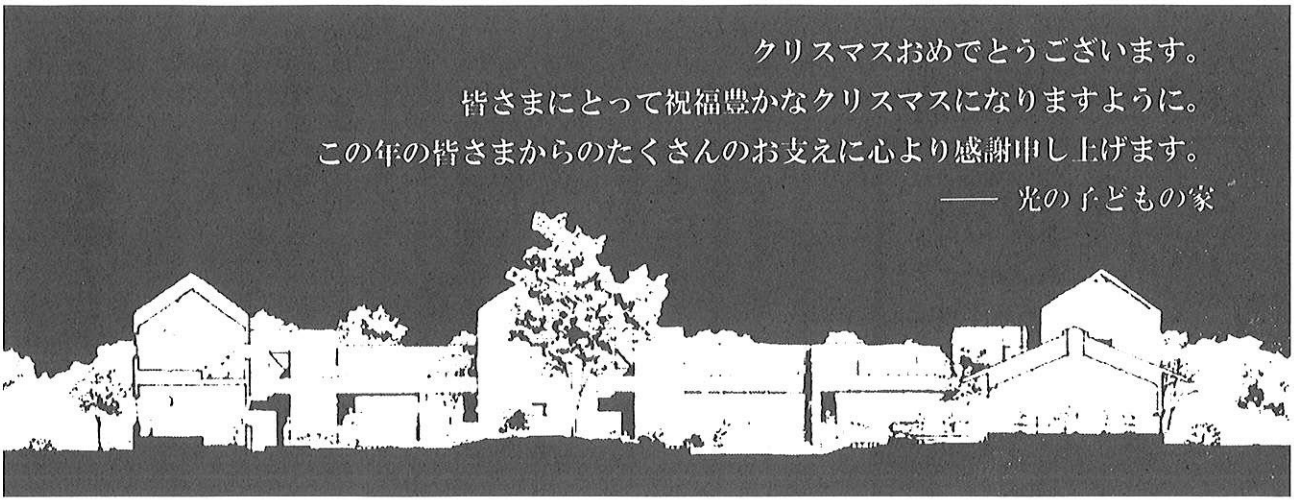
「別にいいし。どうせ死ぬなら速攻、骨になってなくなって欲しいし。」

と、会話を断ち切りました。

彼女は早くに父を亡くし、母一人子一人です。母が亡くなると一人ぼっちになってしまうという不安に耐えられなかったのでしょう。

そこには気安く「一人じゃないよ」などと言えない、めまいがするような寂しさがあります。寄り添われることを拒むような殺伐とした彼女の言動に自信も確信も粉々になってしまう日常ですが、居なければならないとき、居なければならないところにしっかりと居て、差し出されたときの手をちゃんと握り返せるような自分でいたいと改めて思います。

皆さま、どうぞ、心豊かなクリスマスをお過ごし下さい。



日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2013年7月～8月

２０１３年７月現在
幼児４名　小学生１５名　中学生９名　高校生８名　３６名
５日　若月健吾牧師による職員礼拝　司式説教奉仕感謝
８日　小学校との連絡会
１０日　光の子どもの家後援会による頑張ろう会　おいしい手打ちうどん・そばをいただく　感謝
１２日　芹沢俊介氏による施設内研修
１３日　服部さんによる散髪奉仕　山岸さんによる学習ボランティア　感謝
１７日　蓮田市民生委員・児童委員が２８名来訪見学
１９日　夏休みオープニングパーティ
２３・２４日　卒園生三浦兄弟の母の前夜式・告別式　卒園生や関係者などが参列
２５日　小学校低学年の子どもたちが日光白根山登山へ　急登が続く道に苦戦しながらも全員で登頂
３０日　開成高校の化学教諭斎藤先生・宮本先生とカリタス女子高校の英語教諭宮本先生が来訪し出張科学実験教室を開講　子どもたちは楽しい実験に興味津々　一生懸命ノートを取っている子も　感謝
㈱三基商事より支店長様はじめ４名来訪し子どもたちの豊かな心を育む取り組みとしてたくさんの絵本を寄贈してくださる　感謝
３１日　小学校高学年の子どもたちが蓼科山登山へ　川遊びなども楽しむ
３１日　佐藤家の子どもたちが長野へ旅行
８月
５日　原田家の子どもたちが東北へ旅行
６日　グループホームの子どもたちが湯河原へ旅行
１１日　仙道家の子どもたち中心に秋田へ旅行
１９日　東大宮教会教会学校の中高科夏期学校
２３日　聖学院大学の学生によるワーク
２９日　写真家福島力氏によるポートレート撮影　食堂に飾ってある毎年のポートレートも今年で７枚目となる　長年に亘る最高のプレゼントに感謝
３０日　さよなら夏休みパーティ　埼玉県マスコットキャラクターのコバトン来訪

＜７・８月の物品寄贈者各位＞
高橋和男　岡田光生　角尾和子　中村久美子　浜田文昭　小暮伸二　宿谷幸代　中島房子　森公子　ビームス古河店　後藤利子　早野冬木　中野和義　宮崎尚政　マルキチ物産　阿久津利二　日本レコード協会　セカンドハーベストジャパン　ほか多数
☆今年も豊かな出会いの中で子どもたちが成長できたことを感じ、心より感謝しております（洋）

反射光

☆クリスマスおめでとうございます。今年もいよいよ締めくくりの時期を迎えています☆振り返ればこの年もたくさんの方々との出会いや多くのご支援の中で、何とか歩んできた私たちです。現代社会の持つ生き辛さを跳ね返すような、大きなお支えをいただいています。心より感謝申し上げます☆力及ばない私たちに比べて子どもたちの成長はたくましく、何からでも学び取ります。雨が降ったらどこに水溜まりができるかを知っている、どの花に蜂が多く集まるのかを知っている、このような知識は子どもの実体験として着実に積み上げられていきます。生き辛い世の中を生き抜く術を学ぶために必要なのは教育だけではなく、子ども自身が生きていく中で体験的に学ぶ機会を保障することが重要なのだろうと思います☆今年のクリスマスを迎えるにあたり、この年に与えられた豊かさを感謝すると共に、子どもたちが本当の豊かさを持った人となるように心から祈ります。皆さまに祝福豊かなクリスマスが訪れますように。（洋）